

古事記と恵比寿神

えびすは日本の神で、現在では七福神の一員として日本古来の唯一（その他はインドや中国由来）の福の神である。狩衣姿で、右手に釣り竿を持ち、左脇に鯛を抱える姿が一般的。



古くから漁業の神でもあり、後に留守神ともされた。夷、戎、胡、蛭子、”蝦夷”、恵比須、恵比寿、恵美須なども表記する。**恵比寿**は、日本の国土を生み出した一対の男女の神様、♂伊弉諾尊(いざなぎのみこと)と母親 ♀伊弉冉尊(いざなみのみこと)の子・蛭子尊(ひるこのみこと)が「えびす様」になったと言われています。

蛭子尊は、今で言う身体障害者だったらしく、3歳まで足が立たなかつたという。伊弉諾尊(いざなぎのみこと)と伊弉冉尊(いざなみのみこと)は天の岩戸の話で有名な天照大御神(アマテラス)の両親。

イザナギとイザナミは「天の浮橋」にたつてほこで、海をかき回すと島が一つ生まれた。日本最初の国土でオノロコ島、今の淡路島だろうと言われている。

二人は島に「天の御柱」をたて、柱の周りを回って最初の子を産む。この子が未熟児の蛭子。蛭子で失敗をしたイザナギとイザナミはもう一度、柱を回りなおして、四国とか壱岐とか佐渡といった島々、さらに日本の国土を生み出した。

記紀神話によると、蛭子神は伊邪那岐命、伊邪那美命夫婦がまだ混沌としていた地上に降り立って日本列島の島々の神を生もうとしたとき、最初に生まれた子であったという。しかし、水蛭子(ヒルコ)と呼ばれたその子供は成育が悪く、3才になつても足が立たなかつた。そのために両神は、葦船に乗せて蛭子神を海に流した。このあたりの事情は国生みをお読みください。神話では蛭子神のその後の運命は語られていないが、海の彼方の常世の国に渡つたのかもしれない。

古事記 3巻の構成

下つ巻	中つ巻	上つ巻
人の物語	神と人の物語	神の物語
33代推古天皇 ～ 16代仁徳天皇	15代応神天皇 ～ 神倭伊波礼毘古命 (初代神武天皇) 神倭伊波礼毘古命	神倭伊波礼毘古命 ～ 天之御中主神
西暦592年	西暦310年	紀元前
		神々の時代

↑「古事記」は、3巻に分かれている。上つ巻(上巻)は神話の世界を描く。中つ巻は神武天皇から応神天皇。下つ巻は推古天皇までを描く。

サライ 2005年 9/1号 P21



西宮神社の伝説によると、海に流された蛭子神は海を漂つたのち摂津国西浦(兵庫県西宮)の海岸に漂着。土地の人々は拾った蛭子神を大事に養い育て夷三郎(エビスサブロウ)と呼び、そののち夷三郎大明神、戎大神として祀られるようになった、と伝えている。このような形でエビス神は海の神として信仰されるようになり、豊漁や航海の安全、交易の守護神としてその霊験を発揮するようになったのである。

蛭子神はエビス神とも呼ばれ、一般には「えびすさん」として親しまれている。エビス神というのは、七福神の中で恵比寿、大黒と並び称されるように、商売を繁盛させて富と幸福をもたらすと信じられている福神である。

もともとは漁業関係者の信仰が中心であった蛭子神が、いつから福神の性格を備えるようになったのかというと、それは商業の発達する室町時代のことである。商業が盛んになると物や人が集まる市場が形成され、そこには神霊が宿ることになる。一般に市神というとき、土地の神さまや稲荷神をはじめさまざまな神がいるが、そもそも海産物の恵みを司る蛭子神もそうした市場の守護神の仲間に加わり、次第に商都大阪の商人たちの中で商売繁盛の神として崇敬されるようになったのである。